The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	青信号はなぜ縁信号ではないのか ： 「アオ」の持つメタファーから考える
Author(s)	小倉, 慶郎
Citation	大阪大学日本語日本文化教育センター授業研究. 2012, 10, p. 13-21
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/11672
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

青信号はなぜ緑信号ではないのか
—「アオ」の持つメタファーから考える—

小倉　慶郎

【要旨】

『授業研究』第５号で、green appleを青りんごと呼ぶ日本人の色彩感覚を筆者は紹介した。また、交通信号のgreen lightを青信号と呼ぶ日本人の習慣は、留学生のみならず日本人でも疑問に思うことが多い。なぜgreenを青と呼ぶのか。その他にも、「月がとっても青いから」という有名な歌があるが、なぜ月の色が「青」になるのだろうか。調べてみると諸説がある。古代日本では色名が４種類しかなかったことに根拠を求める説が一番有力なようだ。古代には「明」と「暗」を表すシロとクロ、「顕」と「漠」を表すアカ、アオの４種類しかなかった。それが現代人の色彩感覚にも影響を及ぼしているというのである。しかしこれだけでは、この現象を十分に説明できないのではないだろうか。古代中国から伝わった「五行説」から説明する論者もいる。諸説を整理し、どのように説明したら留学生に納得してもらえるかという視点で、「アオ」を使うときの日本人の感覚について考察したい。

はじめに

筆者は、本センターでは日本語と英語間の通訳・翻訳の授業を担当しているため、日英の表現の違いには人一倍敏感である。「青信号」をgreen light、「青りんご」をgreen appleと訳すことに慣れてはいても、留学生からの質問に備え、どう説明したらいいかを常に考えなければならないからだ。

『授業研究』第５号では、筆者は留学生との以下のやりとりを紹介した。

教師：青りんごは、英語ではgreen appleだ。日本語では、緑色のことをよく「青」と表現することがあるね。「山が青々として」などはよく使う表現だ。本当に山がブルーというわけではない。あくまで色はグリーンだ。
学生１：ではどういうときに、青といい、どういうときに緑と使い分けるんですか？
教師：……。
以下略

greenなのに「青」信号、「青」りんごというのも奇妙だが、「青い月」とはどんな色の月なのか、と聞かれて戸惑うこともある。「青い月」とは普段はまず言わないが、以下の有名な歌詞で人口に膾炙している日本語表現である。

月がとっても　青いから
遠廻りして　帰ろ
あのすずかけの　並木路は
想い出の　小径よ
腕を優しく　組み合って

二人っきりで　さあ帰ろう[1)]

ここで歌われている「青い月」とはどのような月を言うのだろう。加藤（2006：26）は、古代日本語の名残で「淡く輝く月」を「青い月」と呼ぶのだ、という。これは本当なのだろうか。またもしもこの説明が正しくないとしたら、どのように留学生に説明したら納得してもらえるだろうか。

本稿では「青信号」「青いりんご」「青い月（月が青い）」という表現に共通する、日本語のアオの感覚を探る。諸説を整理しながら、最終的に留学生に対して、どのような説明が最も適当であるかを考えてみることにする。

1．古代日本語の色名

『広辞苑』（第5版）の「青」の解説を見てみよう。

青

一説に古代日本語では、固有の色名としては、アカ・クロ・シロ・アオがあるのみで、それは明・暗・顕・漠を原義とするという。本来は灰色がかった白色をいうらしい。

この記述は、佐竹（1980）に基づいている。佐竹の「古代日本語における色名の性格」と題した論文はここでは詳しく紹介しないが、古代色名について言及するときに必須の文献となっている。古代色名に関して自明のこととして語られる記述は、ほとんどこの佐竹論文がもとになっているようだ。

しかし日本の古代に4つの色名しかなかったとしても、その当時の日本人がモノトーンの世界に生きていたという意味ではない。もしもそうであれば古代人はみな「色盲」というレッテルを張られるだろう。古代社会は、現代社会ほど複雑ではないから、4つの色名しか必要ではなかったということであろう。そして社会が発展するにつれ、言語も発展し、基本的な色名はしだいに増えていくらしい。次節では、基本的色名の進化論に触れる。

2．色名の進化論

Berlin & Kay（1969）は色名進化論のバイブルである。この中で、二人は世界各地の言語から集めたデータを分析し、基本色名（basic color terms）は以下の順序で進化し、色名が増えていくという説を主張した[2)]。

第1段階　black, white…2つの色名（正確には、blackと大半の暗い色調、whiteと大半の明るい色調を指す。以下同じ。色名の周辺の色も指す。）
第2段階　black, white, red…3つの色名
第3段階　black, white, red, green or yellow…4つの色名
＊greenはblueの領域も含む
第4段階　black, white, red, green, yellow…5つの色名
第5段階　black, white, red, green, yellow, blue…6つの色名

第6段階　black, white, red, green, yellow, blue, brown…7つの色名
第7段階　black, white, red, green, yellow, blue, brown, purple, pink, orange, grey
…8～11の色名

この進化論によれば、日本の古代色名は第3段階にあたり、現在の日本は第7段階にあることになる。もしもこのような色名の分化、進化が世界中のどの文化にも起こるとしたら、古代の色名に現代の色名が影響され、色名の誤解が起こる現象は、他の国でも見られるはずであろう。しかし筆者が調べた限りでは、日本だけ顕著に色の取り違えが論じられているように思われる。なぜ、日本だけが目立つのであろうか。

Berlin & Kay（1969：42）は、日本語では「アオ」が「ミドリ」よりも歴史が古いこと（このことについてはあとで触れる）、「アオ」はかつてblueとgreenの双方の色にまたがっていたことを指摘している。現在では、中国、朝鮮半島、日本などでは、greenとblueを区別せずに青と呼ぶことが確認されているし、現代の研究者はgreenとblueの合成語grueを使ってその色名を表すこともある。

そうであれば、日本は、blueとgreenの区別が曖昧な文化圏に属すから、古代の色名に影響されて現代でも青と緑の混乱が起きる、と考えればいいのだろうか。これも有力な説明だが、十分な説得力があるとまではいえない。次節からは、諸説を整理して問題の核心を探っていく。

3.「アオ」とは何か

では問題の青はどのように説明されているのだろうか。特に接頭辞として使われる青の定義を『日本国語大辞典』（第2版）で見てみよう。

青【接頭】
1．木の芽などが十分に熟していないことを表わす。「青びょうたん」「青ほおずき」など。
2．年が若く十分に成長していないこと。人柄、技能などが未熟であることを表す。「青二才」「青侍（あおざむらい）」「青女房（あおにょうぼう）」「青道心」など。

あとで論じることになるが、青を接頭辞として用いると、色そのものは無視されて、未成熟、未熟というニュアンスが主体になることに注意したい。念のため、このあとに書かれた解説にも目を通そう。

語誌
（1）アカ・クロ・シロと並び、日本語の基本的な色彩語であり、上代から色名として用いられた。アヲ の示す色相は広く、青・緑・紫、さらに黒・白・灰色も含んだ。古くはシロ（顕）⇔アヲ（漠）と対立し、ほのかな光の感覚を示し、「白雲・青雲」の対など無彩色（灰色）を表現するのは、そのためである。また、アカ（熟）⇔アヲ（未熟）と対立し、未成熟状態を示す。名詞の上につけて未熟・幼少を示すことがあるのは、「若葉」などの「色」を示すことからの転義ではなく、その状態自体をアヲで表現したものとも考えられる。
（2）色名としてのアヲは、ミドリ（これも若やいだ状態を表す意が早い）が緑色（グリー

ン）の色名として定着するにつれ、狭く青色（ブルー）を示すようになるが、なお、ブルー以外の色にも使われ続けている。

（3）アヲがさししめす」色の範囲は広いが、特にミドリと重なる部分が多く、「観智院本名義抄」の「碧・緑・翠」には「アヲシ」「ミドリ」などの訓が見える。……

4．「ミドリ」とは何か

次に緑の定義を見てみよう。

みどり【緑（綠）】

若葉のみずみずしいさまより、緑の名となった。幼児を「みどりこ」というのはそのなごりである。……「みどり」は語源未詳の語であるが、もと色の名ではなく、新村出説に、「みづみづし」と関係があるとするのがよいようである。（『字訓』）

みどり【緑・翠】

ミドが語根で、「瑞々（みずみず）し」のミヅと関係があるか。（『広辞苑』）

緑

本来色の名であるよりも、新芽の意が色名に転じたものか。（『岩波古語辞典』）

佐竹（1980：84-85）は、ミドリの語源はもともと色ではなく「新芽」であったとしており、岩波古語辞典の解説も、編者のひとりである佐竹の説を採っている。「新芽」か「みずみずし」か。いずれにしても、ミドリはもともと色ではなく触感を表した語であったことは間違いない。この触感が現代に伝わっている例として、「みどりご」と「みどりの（黒）髪」がある。同じ『岩波古語辞典』で定義を確認してみよう。

緑児・嬰児

《近世前期頃まではミドリコと清音。新芽のように生まれたばかりの児の意》嬰児。4，5歳くらいまでの幼児にも言う。

緑の髪

つややかな黒髪。「みどりの黒髪」とも。

ちなみにConcise Oxford English Dictionary（Eleventh Edition）によれば、英語のgreenはゲルマン語起源で、Old Englishのgrēne（adj.）、grēnian（v.）に遡ることができる。そして現代英語のgrass（草）、grow（生長する）と同属の語であるという。ここで注意したいのは、もしそうであればgreenはもともとgrassという植物の色から派生した可能性が高く、「生長する」というprocessとchangeの意味合いが含まれている、ということである。とりあえずここではgreenの語源を確認するにとどめ、のちほど再びこの問題を取り上げることにする。

5．五行説

インターネット上の検索サービス「kotobank」の『色名がわかる事典』（講談社）[3]では、古代中国の五行説（万物は木・火・土・金・水の5種類の基本物質からなる）の影響で、日本語の青には緑色が含まれているのだ、という主張が述べられている。五行説の「木・火・土・金・水」は色では「青・赤・黄・白・黒」に相当し、季節では「春・夏・土用・秋・冬」に相当する。

青

.....中国から伝えられた五行説では「木火土金水」の「木」に相当し、季節では春を表す。これが「青春」という言葉となった。この五行説の青は木の葉の色である緑色をも含んでおり、それを青葉というなど現代に引き継がれている。

五行説では、青は「春」に相当する。そのため「春」を想起させる若葉の緑色も青の範疇に含まれるようになった、というのであろう。しかし、現代中国語では交通信号のgreen lightは「緑灯」と呼ばれている。そうなると、なぜ五行説は日本の色名だけに影響を与え、中国語の色名には影響しなかったのだろうかという疑問が残る。

6．日本語では赤と青がセットになっているという説

小松（2001：167-209）は鋭い考察が多く、本稿を執筆する上でも教えられることが多かった。その「日本語の色名」の中で小松は、現代日本語では、アカ⇔シロ、アカ⇔アオ、クロ⇔シロが対義語としてセットになっていることを指摘し、以下の例を挙げて説明している。

（1）アカの反対色はシロである……運動会、吉事
（2）アカの反対色はアオである……色鉛筆、カビ、鬼、紫蘇、蛙
（3）クロも反対色はシロである……凶事、容疑、素人／玄人

中略

赤信号／青信号は（2）のセットであるから、赤鬼／青鬼や赤紫蘇／青紫蘇などと同じように、日本語として自然な命名であることを確認しておきたい。青信号だけでなく、青鬼も青シソも、青カビも、青蛙も色はミドリである。

つまりアオ、ミドリなどという色よりも、ここではアカ・アオのセットとしての使用が優先されているので青信号と呼ぶのだ、という考えである。

本稿では取り上げないが、このほかにも音節数（アオ2音節、ミドリ3音節）が理由であるという説もある。

7．アオの持つメタファーに着目する説

Stanlaw（1997：255-256）は日本の青信号について興味深い考察を展開している。以下に紹介しよう。

少なくとも800年前には、「アオ」はミドリ色の色調の大半を包含していた。ミドリとアオの大きな違いは、アオがfreshness、youth、unripe（新鮮さ、若さ、未熟さ）を想起させること

にある。さらにアオは、inexperienced、naive（未経験の、ナイーブな）という意味と結びつく。そこからさらに意味が敷衍して、pale、sickly（[顔色が]青ざめた、病弱な）という意味も出てくる、という。Stanlawはここで重要な指摘をする。英語のgreenのメタファーの大半は、日本語のアオと重なるという指摘である。そして、以下の例文を挙げる。

He's still a green recruit.（彼は、まだ新入社員（→青二才）だ）
This apple is too green to eat.（このリンゴは、まだ熟していないから（→青くて）食べられない）
Your face looked pretty green after that roller coaster ride.（あのジェット・コースターに乗った後、君の顔は真っ青だったよ）

Stanlawは、日本人がアオを使うとき、starting、beginning-ness（はじまり、開始）の意味合いを込めているようだという。日本人は、明らかに生長したものについて言及するときには、ミドリかアカを使うが、まだ生長過程にあるものを表現するときはアオを使う、という。
次に交通信号の色は、日本もヨーロッパもアメリカもほとんど違いがない、といい信号の色名について言及する。

However, the "green" go-signal in Japan is called the *ao-shingoo* (lit. "blue light"), as in *shingoo ga ao ni natte kara, michi o watatte-kudasai* "please cross the street after the light has turned green [BLUE]."
しかしながら、日本のグリーンライトは青信号と呼ばれるのだ。たとえば、「信号が青になってから、道を渡ってください」と言うのである。

そしてこの現象は、アオの「色」よりもアオが持つmetaphorを優先するために起きているではないか、とStanlawは指摘する。

It is likely that the Japanese people were cuing in on this notion of "starting" or "freshness" when they decided to use *ao* as the name for the green light in their traffic signal. To put it in structuralist terms, a car must *begin* to accelerate when the light changes. This notion of process and change was probably even more of a central factor than hue itself when a label was chosen for the go-light. Thus, neither the native Japanese green term *midori*, nor the English loanword *guriin*, were selected.
日本人が交通信号のgreen lightの呼び名を「アオ」にしようと決めたとき、「開始」「新鮮さ」という概念に目配りしていた可能性がある。構造言語学的に言えば、車は信号が変わると、加速し「始め」なければならないのである。この過程と変化の概念が、おそらくは、「進め」の信号に名前をつけるときに、色そのものよりも重視されたのだろう。かくして、日本語のミドリも英語からの借用語グリーンのいずれも選ばれなかったのだ。

小松（2001：177）も「アオを前部成素にもつ複合語」はほとんどすべてミドリ色の対象を指

していること、また色に基づくよりも未成熟という「含み」が濃厚であることを指摘している。小松が挙げた、色よりも「含み」に基づくアオの複合語は以下のとおりである。

青葉、青菜、青物、青リンゴ、青桐、青虫、青竹、青豆、青畳、アオミドリ（青水泥）、青二才、青ビョウタン

小松は、「青空」「青鉛筆」など実際にアオ色を表す複合語はむしろ例外的であるとしている。また、赤とセットで青と呼ぶ青鬼、赤紫蘇、赤カビ、青ガエルとともに、これら「含みに基づくアオの複合語」は伝統的用法であるとしている。

8．日・中・韓の比較

ここで違った視点から問題に光をあてるために日・中・韓の比較を紹介したい。respondentは、わずか一人ずつであるが、大阪府立大学の中国語、韓国語の熟練教師（ともにnative）に、日本語の以下の表現について、中国語、韓国語に対応する表現があるかどうか聞いてみた。対象となる日本語の表現は、青い月、青リンゴ、青信号、緑の黒髪、みどりご、である。中国人教師は次のように答えてくれた。

「青い月」なんて不思議な表現で、中国語にはありません。「青リンゴ」は中国の一部の地域なら言います。「青信号」なんておかしい（中国語は「緑灯」)。「緑の髪」は中国語では「鬼」を連想させます。「みどりご」は中国語ではa new-born babyではなく「死んだ赤ちゃん」のことです。

以下は韓国人教師の答えである。

韓国語では「青い月」なんて言わないと思います。「青リンゴ」と「青信号」は韓国語でも言います。緑の黒髪は言わない。「みどりご」は自信がありません。韓国語でも「青」と「緑」は気にせずに混同して使いますよ。若者のことを「青い」という表現もします。

以上の答えを表にまとめると以下のようになる。「青」「緑」の感覚は、少なくとも現代の日本語と中国語ではほとんど重なるところがなく、日本語と韓国語では「青」のメタファーに関してはほとんど重なっている、ということが言えると思う。

用例	日本語	中国語	韓国語
青い月	○	×	×
青リンゴ	○	△	○
青信号	○	×	○
緑の黒髪	○	×	×
みどりご	○	×	?

終わりに

筆者は、本稿の７で考察した「アオ」のメタファーから、日本語の青信号が緑信号ではない理由を、明快に留学生に説明できるのではないかと考えている。また英語のgreen appleがなぜ日本語では「青りんご」と呼ばれるのかも、この視点から説明できるだろう。日本語のアオは英語のgreenとメタファーの大半が重なる。そして特に接頭辞として使われる場合、色は無視され「開始」「新鮮さ」「未成熟」というメタファーが優先される。この説明は、英語話者に受け入れられやすい。英語にも極めて類似した例があるからだ。

英語でも、The new trainees are still green.（この例文はOxford Advanced Dictionaryより）「入ったばかりの研修生たちは、まだ青二才だね」という。この場合、もちろん人間の色がgreenなのではない。色調は無視され、その後ろに隠されたinexperiencedという意味が表に出ているのである。このように言語の共通性から説明すれば留学生は理解しやすいはずである。筆者の造語になるが、これを仮に色名を表す形容詞の「隠喩用法」としておこう。冒頭で取り上げた「月がとっても青いから」という歌詞もこれで説明が可能である。この「青い」が「隠喩用法」だとすれば、月の色調を言っているのではなく、東の空に出たばかりの清新な月を指すことになるだろう。そうであれば、まさに二人きりのデートにふさわしい月夜となるのである。

このように主に接頭辞として「アオ」が使われ、「隠喩用法」を示す例は枚挙にいとまがない。なんといってもこれは、小松が指摘する伝統的用法なのだから。

また「緑の黒髪」「みどりご」という表現も、ミドリの「隠喩用法」と定義すればわかりやすい。色名を使いながらも色そのものは無視して、その語が想起させる裏のイメージを使用しているからだ。

本稿ではアオ、ミドリ、greenを検討しただけだが、日本語だけでなく、英語にもこの用法が見られることがわかった。そしておそらくは他の多くの言語、色名にも存在するのではないかと推論しても、決して間違えではないだろう。

なお筆者は、本稿で検討した「隠喩用法」以外の説明は間違っている、と考えているわけではない。このことは強調しておきたいと思う。一つの事象に対する解釈はいくつかあってもおかしくはない。筆者が主張しているのは、言語・文化の普遍性に目を向けると、留学生に対して説得力がある説明ができるということである。また従来にない明快な説明も可能となる。

日本語・日本文化の特殊性を強調するのではなく、むしろ他言語・他文化との共通性、普遍性から説明することに、筆者は意義を感じている。これからも「共通基盤」に目を向けて日本語・日本文化について考察していきたいと思っている。

注

1）「月がとっても青いから」作詞：清水みのる、作曲：陸奥明。菅原都々子が昭和30年に歌いヒットした歌謡曲。

2）Kay & Maffi（1999）では、以下のような進化説の修正モデルが提示されている。2～6種類へ基本色名が増えていくというのが最新のモデルだが、色名の「進化論」そのものには変更はない。

<table>
<tr><td rowspan="3">white/red/yellow
black/green/blue</td><td rowspan="3">white
red/yellow
black/green/blue</td><td>white
red
yellow
black/green/blue</td><td>white
red
yellow
green
black/ blue</td><td rowspan="3">white
red
yellow
green
blue
black</td></tr>
<tr><td>white
red/yellow
green/blue
black</td><td>white
red
yellow
green/blue
black</td></tr>
<tr><td>white
red
yellow/green/blue
black</td><td>white
red
yellow/green
blue
black</td></tr>
<tr><td>Ⅰ</td><td>Ⅱ</td><td>Ⅲ</td><td>Ⅳ</td><td>Ⅴ</td></tr>
</table>

Types and Evolutionary Stages of Basic Color Term Systems (adapted from KBMM, figure 2.4, page 33).

3）URLを右に記す。http://kotobank.jp/word/%E9%9D%92

参考文献

Berlin, B., & Kay, P. (1969). *Basic Color Terms : Their Universality and Evolution.* Berkeley and Los Angeles, California : University of California Press.

Kay, P. et al. (2011). *The World Color Survey.* Stanford, California : Center for the Study of Language and Information.

Kay, P., & Maffi,L. (1999). Color Appearance and the Emergence and Evolution of Basic Color Lexicons. In *American Anthropologist*, vol.101, No.4, 743-760.

Stanlaw, J. (1997). Two Observations on Culture Contact. In C. L. Hardin & L. Maffi (ed.) *Color Categories in Thought and Language.* Cambridge and New York : Cambridge University Press, 240-260.

加藤徹（2006）『漢文の素養　誰が日本文化をつくったのか』光文社

小松英雄（2001）「日本語の色名」『日本語の歴史　青信号はなぜアオなのか』笠間書院

佐竹昭広（1980）「古代日本語における色名の性格」『萬葉集抜書』岩波書店

（おぐら　よしろう　大阪府立大学教授、本センター非常勤講師）